

「転向」の時代のプロレタリア・エスペラント ——生き抜くための抗い——

神村和美

I. 関東大震災から紐解くプロレタリア・エスペラント運動と問題の所在

今年—2023（令和五）年は、関東大震災（1923（大正一二）年9月1日）から100年となる年である。なお、この歴史的な大震災は、戒厳令下で起こった流言飛語による朝鮮人の虐殺、行商人の虐殺（福田村事件）、平沢計七ら労働運動家の虐殺（亀戸事件）、アナキスト大杉栄らの虐殺（甘粕事件）などの数々の事件の犠牲者の存在とともに記憶され続けるべきものであることはいうまでもない。

ところで、震災下の虐殺事件の犠牲者の一人であった大杉栄が日本のエスペラント運動史に遺した大きな足跡については、今や触れられることは多くはないのではないだろうか。大杉は、本郷にエスペラント学校を創設し千布利雄らに教授するだけでなく、国際エスペラント誌を通じて日本の社会運動事情を発信し、さらに中国人留学生を対象とした講習会を開きエスペラントが中国へ伝わるルートを開くなど、いわゆる国際通信という形でのエスペラントの実用を先駆的に行い、国境を越えてのエスペラント普及に努めた紛うことなきエスペランティストであるといえる⁽¹⁾。「一犯一語」という言葉を遺した大杉であるが、語学においても「行動」の人であったことが窺えるであろう。

大杉や平沢計七らの虐殺が発覚した後、ジャーナリズムではとりわけ大杉への追悼文が多く発表されたということであるが⁽²⁾、当時の日本のエスペラント運動の主流であった日本エスペラント学会（JEI）の機関誌をはじめ、エスペラント各誌は、大杉への追悼記事を発出することはなかったという⁽³⁾。このようなことも、エスペランティストとしての大杉を後景に追いやってゆく一因であったように思われる。

なお、初芝武美は、大杉の虐殺に対するエスペラント界の冷淡な反応に関し、各エスペラント団体が「震災後の混乱の後始末に追われ」ていたことをその理由としつつ、大杉は「世間的には有名人ではあってもエスペラント界では過去の人であったのだろうか」と問いかけている⁽⁴⁾。しかし、仮に大杉が彼らにとって「過去の人」であったとしても、「民族、言語、宗教を差別することなく、その差異を認めたいうえで、人類の正義と平等をうたった」「ホモラニスム」（人類人主義）を掲げたJEIからして、民族や言語、思想の相違を根拠に起こった虐殺事件に対し沈黙を決めこんだこと

は、中立主義的なエスペラント運動が社会的には何の力をも持ち得ないことを大衆に知らしめてしまう結果を招いたであろうことは想像に難くない。

一方、プロレタリア文化運動の草創期を象徴し、エスペラントや国際語思想への高い意識をも発信していた『種蒔く人』は、震災と弾圧により刊行不可能に陥りながらも、東北秋田に拠点を持っていたことを活かし、『帝都震災号外』（1923年10月1日）、『種蒔き雑記』（1924年1月20日）を発行、震災を利用しての朝鮮人や社会主義者への迫害を告発していった⁵⁾。

1921（大正一〇）年創刊のこの雑誌は、東京版の表紙にはエスペラントの題字 *LA SEMANTO* (*semanto* = 種を蒔く人) を用い、労働者エスペランティストの国際組織である SAT (*Sennaciaca Asocio Tutmonda* 全世界脱民族性協会) の諸雑誌からの記事を訳載し、エロシェンコやアナートル・フランスにまで協力を求めるなど、後に大きく発展してゆくプロレタリア・エスペラント運動との連続性を持つメディアであった。社会主義運動とエスペラントとの蜜月は、大杉の系譜をひくアナーキストたちの活動から始まったが⁶⁾、アナーキズム・ボルシェビキ・人道主義の共同戦線を張り、グローバルな情報を盛り込んだ『種蒔く人』もまた、積極的にエスペラントを取り入れ、運動の国際性、世界的同時性、反帝国主義をアピールしながら反戦思想を訴えていったのである。そして、『種蒔く人』同人であり、後にプロレタリア・エスペラント運動の指導者となるエスペランティスト秋田雨雀は、震災下の朝鮮人虐殺事件に抗し戯曲「骸骨の舞跳」(『演劇新潮』1924年4月) を発表し、自らの抗議的立場を明らかにするだけでなく、1927（昭和二）年には同戯曲のエスペラント訳 *Danco de skeletoj* を発表し、帝国主義的イデオロギーに踊らされた民衆が齎すレイシズムの暴力性を世界に問うた。

なお、前掲の初芝によると、震災から一年後の1924（大正一三）年、「ホモラニスマ派（学会派）にあきたらない」エスペランティストたちによって初めてSATの分科会がもたれ、*Japana Esperantisto Proleta* という「プロレタリア・エスペラント運動のさきがけともいえる集まり」が結成されたということであるが、ここで選定された委員に、秋田雨雀にエスペラントを学び、『種蒔く人』にエスペラントを積極的に取り込んだ仕掛け人ともいべき佐々木孝丸がいることから、「学会派」からプロレタリア・エスペラント運動へとシフトチェンジしていったエスペランティストたちは、単に「ホモラニスマ派（学会派）にあきたらな」かったというより、厳しい情勢の中でも声を上げることをやめないプロレタリア文化運動の理念と行動力に魅了され、共感を寄せていった可能性が強いのではないだろうか。

そして、1930（昭和五）年になると、プロレタリア・エスペラント運動はさらに急激な発展を見せていくこととなる。比嘉春潮の主導下にあったエスペラントグループ〈柏木ロンド〉のメンバーであった中垣虎児郎と大島義夫が、ソヴェートから帰国し

た秋田雨雀を所長とする〈国際文化研究所〉(1931年より〈プロレタリア科学研究所〉となる)主催のエスペラント講座講師として協力したことから、日本プロレタリア・エスペランティスト協会(JPEA:Japana Prolet-Esperantista Asocio 以下、ポエアと表記)が結成され、プロレタリア・エスペラント運動における大きな成功ともいえる『プロレタリア・エスペラント講座』(全6巻 鉄塔書院 1930年9月~31年10月)が誕生するのである⁽⁷⁾。

さらに、翌年1931(昭和六)年1月、ポエアは日本プロレタリア・エスペランティスト同盟(JPEU:Japana Prolet-Esperantista Unio 以下、ポエウと表記)へと発展解消し、日本プロレタリア文化連盟(KOPF:コップ)に加盟する。しかし、彼らを待ち受けていたのは、満州事変を機に激化してゆく弾圧と、小林多喜二虐殺と共産党幹部の佐野学・鍋山貞親による転向声明が齎したいわゆる大量転向の時代であった。そして、エスペラントを共産主義の宣伝や諜報活動のための言語であると見做した当局は、ポエウに激しい弾圧を加え、壊滅させた後も元ポエウメンバーの動向を探りさらなる迫害を加え、多くの優れたプロレタリア・エスペランティストたちを死に至らしめ、プロレタリア・エスペラント運動は息の根を止められることとなるのである。

ところで、エスペラント受容史の概観を知るには欠かせない文献に、ウルリッヒ・リンスの*LA DANĜERA LINGVO*(栗栖継訳『危険な言語』1975 岩波新書)⁽⁸⁾が挙げられるが、この書の興味深い点は、「左翼的あるいは単に自由主義的エスペランティストたち」に対する当局の非情な弾圧の実態を暴露しながらも、同時に権力者側を擁護するような姿勢をも隠さないことにある。

例えばリンスは、JEIや大都会のエスペラント会は特に妨害されなかったとし、「われわれの知るかぎり、日本ではエスペラントが公に「危険な言語」の烙印を押されたことは一度もない。個々のケースではいかにおそるべきものであったにせよ、テロは偶発的であって計画的におこなわれたものでなく、たとえばドイツで猛威をふるった計画的弾圧の域には達しなかった」(栗栖継訳、以下断りが無い限り同じ)と断言している。ここで、小林多喜二虐殺に対する宮下弘元特高係長の言葉―「拷問で殺したとはおもっていませんよ。殺したというんじゃない。死なせたわけですね。」(宮下弘『特高の回想 ある時代の証言』1978 田畑書店 126頁)―を想起すると、左翼系文化人に対する「テロ」(拷問)が「偶発的」か「計画的」かという問い自体が不毛であるように思われてくるであろう。なぜなら、手を下した側が「テロ」を「偶発的」なものだったと主張することは目に見えており、一方、「偶発的」だとされる「テロ」で命を奪われた運動家たちは決して少なくなかったからである。

なお、リンスは、ポエウについて「そのメンバーに、エスペラントがよくできることよりも、政治的意識を多く持つことを要求し、弾圧されたり誤りをおかしたりで、大衆とのつながりを失ってしまったのである」と記し、権力による弾圧を組織の「内

部的誤り」と同列に置いている。また、非転向を貫き亡くなったプロレタリア・エスペランティスト佐藤時郎については、「エスペラントの持つ理念的側面を強調しすぎたことも、日本の秘密警察「特高」を刺激した。」とし、特高を「刺激」した佐藤に非があったかのように述べている。そして、最も疑問に思われるのは、戦時下のプロレタリア・エスペランティストたちの抗いが、日本エスペラント学会（JEI）の「中立性」との対比の下、「自殺的抵抗」というレトリックで表現されていることである⁽⁹⁾。

以上のようなリンスの叙述を繋ぎ合わせると、プロレタリア・エスペラント運動の「誤」った方針が弾圧を招き、さらに「計画的弾圧」を意図していなかった権力者側を挑発するような「自殺的抵抗」を試みたからこそ、「偶発的」なテロが発生したという構図が浮かび上がる。同時にそれは、中野重治が回顧した「プロレタリア文学運動が解体されたとき、これにたいする同情のある誤解がうまれ、それが悪意のある曲解にむすびつけられてある社会的役割を演じた事実」を髣髴させるものでもあろう。中野は次のように説明している。

作家が革命的であるのはいい、しかしただ殺されぬ程度において。プロレタリア文学運動はいい、しかしただ弾圧されぬ程度において。殺されても進もう、弾圧とたたかっても進もうというのは却ってぶちこわしである。このぶちこわす流れをぶちこわせ。反動を呼び出したそもそもの動きこそまず破壊されねばならぬ—これが、この種の曲解宣伝の演じた社会的役割だったのである。⁽¹⁰⁾

リンスのレトリックの底には、この「曲解宣伝」と響き合うものが流れているように思われるが、このような観点が行き着く先が、「動と反動とに力学的関係だけをみて、本質としての歴史的な性格をそこから抜くことによって陥る結果論でしかないことを別括した中野の言葉は傾聴に値するであろう。

ただし、リンスのポエウ観が、戦前のプロレタリア・エスペラント運動の当事者であり、内部事情に精通していた大島義夫、宮本正男の証言に拠ったものである可能性が高いことも記しておかねばなるまい。彼らが著した『反体制エスペラント運動史』（大島義夫・宮本正男 1974 三省堂）によると、当時の左翼文化団体のうちで最後まで生き残ったのはポエウであり、その理由は、「文化運動本来の使命を放棄し」、専門家的知識・能力を持たずしても幹部になれるという性格ゆえであったとされている。つまり、文化団体としての脆弱性が、組織の延命に繋がったというアイロニカルかつ逆説的な現状があったということが証言されているのである。

しかし、ポエウがなぜ文化団体としての発展を追求せず、政治的意識の強調へと舵を切らねばならなかったのかという根源的な問いに立つと、ファシズムへと傾斜し、わずかな不協和音であっても暴圧でねじ伏せ、帝国主義戦争へと突き進んでゆく国家

情勢に対し、立ち上がりにはいられなかったプロレタリア・エスペランティストたちの想い—関東大震災下の虐殺の犠牲者や、教育の機会を奪われている世界のプロレタリア階級の言語問題に関心を寄せてきたプロレタリア・エスペラント運動のエートス—が自ずと見えてくる。そして同時に、左翼運動からの離脱者が相次いだ「転向」の時代におけるポエウ及び元ポエウメンバーたちの命を賭した活動を、安易に権力を「刺激」しただけの「自殺的抵抗」にすぎなかったと切り捨てることは果たして妥当なのだろうかという疑問も生じる。

そこで本稿では、上記の問いに答えるべく、弾圧と転向の時代におけるプロレタリア・エスペランティストたちの活動の軌跡を一次資料から辿ることで、彼らの抵抗の本質を探ってみたい。その方法として、プロレタリア・エスペラント運動の素地ともいべきローマ字運動、弾圧下のポエウの動向に触れることから始め、ポエウを相対化しつつプロレタリア・エスペラント運動を再生させようと邁進した元ポエウメンバーたちが刊行した3種類の雑誌—『国際語研究』(STUDO PRI LA LINGVO INTERNACIA)・*MARŠŪ*・*Majo*—を紐解き、困難な時代のプロレタリア・エスペランティストたちの闘いの様相を考察する。

II. プロレタリア・エスペラント運動の特徴

—ローマ字運動との関連と越境性—

ポーランド(当時はロシア領)のユダヤ人医師、ラザル・ザメンホフが人工国際語であるエスペラントを発表したのは、1887(明治二〇)年のことであった。当時は少なくとも5種類の「世界語」が拮抗していたが、なかでも群を抜き勢力を誇っていたヨハン＝マルティン・シュライエルのVolapük(ヴォラピュク)が支持者間の不一致などで急速に衰退していったのに対し、エスペラントは人類の統一と平和をもたらす新時代の言語として世界各国の進歩的知識人に迎え入れられていったという⁽¹¹⁾。「希望する人」というシニフィエを持つエスペラントは、ロマン・ロランのレトリックに倣えば、「学者の言語と人民の言語」とに分断されていた従来の言語とは異なり、「人類解放の武器」となりうる将来性を秘めた新しい言語としての期待を背負っていたのである⁽¹²⁾。

なお、日本で初めてエスペラントの存在が紹介されたのは、1888(明治二一)年、『読売新聞』の記事「世界語の評」(『読売新聞』1888年5月2日)においてであるとされている。これは、オランダの『世界語新聞』の記事「シュライエルの世界語が勢力増す 他の4種は自滅か」(1888年3月1日)からの抜粋であり、主にVolapükの宣伝のためのものであった。エスペラントは「簡明なるが如なれど、唯欧州学士社会にのみ学び易く全世界の人民には適せぬ故にシュライエル氏の次に位せる語は第四のものなれど是実に無益の骨折にて」云々と否定的に言及されているにすぎなかったが、こ

の時期のメディアは「世界語」という新言語の存在自体を宣伝し、人々の人工国際語への関心を高めていった⁽¹³⁾。その後、エスペラントが日本の知識人たちに受け入れられるようになったのは、先に触れたVolapükの衰退、日本在住の外国人エスペラント教師の存在、ロシアでエスペラントを学んだ二葉亭四迷の独習書『世界語』（1906 彩雲閣）の刊行などが大きく作用したためということであるが⁽¹⁴⁾、それに加えてローマ字運動の存在も無視できないように思われる。

川副佳一郎の『日本ローマ字史』（1922 岡村書店）によると、日本の国字としてのローマ字採用の主張は江戸期（寛永の時代）から見られたが、徳川幕府に抑圧され運動の機能を断たれていた。しかし、明治維新を経た日本が近代国家として歩み始めると、知識を広く世界に求めることが賞賛され、国字改良論、ローマ字採用の説が堰を切るように勢いづいたという。そして、エスペラントが日本上陸する4年前の1884（明治一七）年には本格的なローマ字運動が発生、さらに1905（明治三八）年には「ローマ字ひろめ会」による機関誌『ローマ字』の刊行が開始されることとなるのである。

なお、エスペラントを初めて日本に紹介した前掲の記事「世界語の評」が掲載される約半月前、同紙において「羅馬字會」と「仮名の會」の将来性について論じた社説「Romajiとかな」（錦球生『読売新聞』1888年4月13日）が掲載されているが、ここでは仮名よりもローマ字の方が「優れる所あるもの」とされ、「羅馬字を学べば一転して英語を学び易し兩転して世界語を学び易ければなり今や我国の教育其方針を英語に取るものの如し況や又世界語の起るに於てをや」と記されている。エスペラント日本上陸の直前に、英語や「世界語」を学ぶための準備としてのローマ字学習を評価する意見がメディアを通じて流布されていたことから、ローマ字運動がエスペラント受容の素地を形作る一要素となっていたことが窺えよう。

また、前章でも触れた、後にプロレタリア・エスペラント運動の母体となったプロレタリア科学研究所の所長を務めたエスペランティスト秋田雨雀も、1916（大正五）年に雑誌『ローマ字』（1916年6月）に*Ainu to Ekaki*という作品を寄稿していることも見逃すことはできまい。この全文ローマ字の小品は、「和人」のアイヌ民族に対する抑圧と、言葉でのごまかしによる容赦のない収奪を描いたものである。秋田がロシアの詩人エロシエンコと出会い、エスペラントを学習し始めたのは1914（大正三）年であることから、この時期の秋田は、エスペラントの洗礼を受けた上でローマ字運動に携わっていたのであろう。また、時代は下るが、アイヌ研究とアイヌ民族へのキリスト教布教で知られるジョン・バチェラーの自叙伝『我が記憶をたどりて』（1928年）の一部「*Ainu no tameni hataraita Dôki*」も『ローマ字』（1929年4月）に再録されていることから、戦間期のローマ字運動は、言文一致という形式上の問題への関心だけではなく、内国植民地と民族問題への意識—つまり、プロレタリア・エスペラン

ト運動が前景化していた問題意識と通ずるものを孕んでいた可能性があるのではないだろうか。

そして、文学作品等をローマ字で綴り、発信するというローマ字運動とエスペラントを結びつけると、ローマ字運動とエスペラント運動とを段階的に連動させようとしていたプロレタリア・エスペランティストの斎藤秀一が学生時代に残した言葉が思い浮かぶ。

日本の文学でも本当に世界に知ってもらおうと望むならば、第一にあの小むづかしい漢字カナを断然よして世界的なローマ字で書くこと、更に第二には傑作をエスペラントで翻訳すること、第三に進んで原作文学を発表することが必要である。⁽¹⁵⁾

斎藤の言葉は、ローマ字運動とエスペラント運動の根底にあるものは、「本当に」「世界」と繋がりたいという純粋な想いにほかならないことを物語っている。強いていえば、「世界」との繋がりが強制的に断たれていた前近代の潜流としてのローマ字運動があったからこそ、近代以降に「世界」を越境しうるエスペラント運動への希求が高まり得たのではないだろうか。「世界」との繋がりが断たれていた時代を潜り抜け、日本語表記の複雑さを解決し、人々の世界への眼を開くという目的を有したローマ字運動と、世界中の民族を一つの言語で平和的に結びつけることを目指すザメンホフのホモラニスモ精神が結びつくことは必然であったといえよう。

ところで、ホモラニスモの理念を掲げたJEIを中心にエスペラント支持者が増えたのは、大正デモクラシーの時代であるが、「内に立憲主義、外に帝国主義」という政治理念の下、植民地政策を突き進めてゆくこの時期の政府に対し、表立って批判の声を上げることは自由主義者でさえも難しかったということである⁽¹⁶⁾。民本主義によってデモクラシーの風潮を理念化したエスペランティスト吉野作造でさえ帝国主義的イデオロギーを完全には克服し得なかったということから、JEIが震災下の虐殺事件に無反応を決め込んだ原因も、このような時代の空気を考慮したうえで捉えなければならないであろう。

一方、ホモラニスモに留まらず、前近代から地続きの日本のローマ字運動を意識的にスプリングボードとし、プロレタリア革命のフィルターを経て立ち上げられたプロレタリア・エスペラント運動は、日本語特有の表記の複雑さゆえに言語行為から下層階級を締め出してしまう国語問題と階級格差社会、植民地での言語帝国主義を同時に解決する救世主として、革命運動の一端を担ってゆくこととなる。

この運動の最たる特徴は、植民地支配の方法として日本語使用を他民族に強制する言語政策を含む同化政策に懐疑の眼を向け、植民地でのエスペラント運動との連帯を試みるなど、日本帝国主義への抵抗を尖鋭化させていた点にあると思われるが、運動

に積極的に携わったエスペ란ティストたちを振り返ると、帝国日本の内部からではなく国境の外から帝国主義を相対化し、エスペラントを単なる言語運動に留めず、眼の前の問題意識へと結びつけてゆく越境性ともいべきものを有しているケースが散見できる。

例えば、山川均・菊栄夫妻と台湾の社会主義者・連温卿をエスペラントで仲介した山口小静は、植民地台湾でエスペラント運動を牽引し、女性差別問題の理論的解決をもエスペラントに見出そうとした。彼女は、「赤化なくして果して徹底的緑化が行はれ得るであろうか」という問題意識を提起した上で、植民地における西暦使用やエスペラント使用が抗日分子を炙り出す根拠とされていること、エスペラント運動が帝国主義と闘うことなくして存在できないと考えられてしかるべき状況を証言している⁽¹⁷⁾。

山口は結核のため二十三歳の若さで夭折するが、彼女の活動を継承する〈クララ会〉(山川菊栄の姉、松栄が創立者)が彼女の遺志を継ぎ、エスペラントを通して社会主義思想と婦人解放を訴えていった。なお、三宅栄治によると、〈クララ会〉はプロレタリア文学運動の主流派であるNAPF(ナップ)と対立する非共産主義の文学潮流—労農芸術家聯盟と接触を持つようになったため、『反体制エスペラント運動史』を著した大島義夫らは、〈クララ会〉をプロレタリア・エスペラント運動の範疇から外して捉えていたという⁽¹⁸⁾。近年批判されている、ナップを中心に据えた従来のプロレタリア運動史観の典型例ともいえようが、三宅の指摘の通り、社会主義運動とエスペラントという大きな枠組で当時の活動を捉えた方が、「反体制」的なエスペラント運動の全体像、そしてエスペラントからジェンダー問題へと拡がりを見せていた山口小静および〈クララ会〉が立ち上げたエスペラント運動の越境性が見えてくるであろう。

また、プロレタリア・エスペラント運動組織の起源とされる、比嘉春潮、大島義夫、中垣虎児郎らの〈柏木 Rond〉もまた、帝国日本を植民地から俯瞰する視点を持っているエスペ란ティストたちがグループの大きな柱となっていたといってもよい。

リーダーである比嘉春潮は沖縄の生まれであり、琉球が沖縄として日本に組み込まれて四年後に生を受けた。内国植民地である沖縄に対する差別を経験し、キリスト教、トルストイズム、社会主義思想に近づいた比嘉であるが、彼にとってエスペラントは社会主義活動のための一手段だったという⁽¹⁹⁾。

そして、メンバーの中垣虎児郎も、中学時代に二葉亭四迷の『世界語』を手にしていたということもあったが、植民地朝鮮で教員をしていた時に、人間教育ではなく臣民教育をおこなっている当時の教育に嫌気がさし、エスペラント講師として身を立てることを決意したと語っている。⁽²⁰⁾

このように、植民地というトポスから宗主国を批判する眼差しを有したエスペランティストたちと、フランスから取り入れた反戦思想とインターナショナリズムを標榜した『種蒔く人』の同人であり、ソヴェートに招かれエスペラント教育の実際を見るだけでなく、アンリ・バルビュスとも会ってきた秋田雨雀らプロレタリア文化運動のグループとが共闘することにより、プロレタリア・エスペラント運動が急速に展開されていったのである。つまり、外の世界から日本の帝国主義を相対化する視点を獲得しえた人々が、言語運動に希望を見出したときに選択されたものがプロレタリア・エスペラント運動であり、彼らが携わることにより、運動の越境性、国際性は保たれていたといえよう。知識人である彼らが、いかに大衆と結びつくかを試行錯誤していた奮励努力の痕跡は、遺された雑誌やエスペラント講習会の広告、プロレタリア文学作品などに刻まれているが、次章からは、転向の時代という困難な時期に発行されたメディアを中心に、プロレタリア・エスペランティストたちの闘いを探っていきたい。

Ⅲ. 弾圧・転向の時代とポエウ

プロレタリア・エスペラント運動の越境性、国際性を如実に顕すメディアの一つに、ポエウが発行した大衆啓蒙雑誌『カマレード』がある。プロレタリア・エスペラント普及のための講座コーナー、エスペラントを通じての国際連帯を促す国際通信、海外のアヴァンギャルド文化の紹介など、充実した誌面を誇ったこの雑誌は、『プロレタリア・エスペラント講座』と並んでポエウの遺した大きな遺産であった⁽²¹⁾。しかし、プロレタリア・エスペラント運動が大きく羽搏くことができた時期は短く、文化団体への大弾圧開始直前に開催された1932（昭和七）年3月20日のポエウ第二回大会は、警官や私服刑事の立ち合いの下で行われ、不当解散を強いられた上に本部が西神田署に襲われるという顛末を迎える。ポエウメンバーは、この暴圧がまもなく始まるであろうプロレタリア文化団体への大弾圧の前哨戦であることを察したとのことであるが⁽²²⁾、彼らの想定通り、わずか4日後の3月24日から26日にかけて、合法団体であったはずの日本プロレタリア文化連盟（KOPF：コップ）への大弾圧が始まり、コップの重要組織であるプロレタリア作家同盟（NALP：ナルプ）の蔵原惟人、窪川鶴次郎、壺井繁治、中野重治らが逮捕され、小林多喜二は地下活動へと身を翻した。

さらに、転向時代の到来前夜ともいべきこの時期に、ポエウ結成以前からプロレタリア・エスペラント運動に携わっていたエスペランティストたちの動きに変化が生



城西大学神村和美研究室所蔵

じ始める。弾圧の前哨戦となったポエウ第二回大会で、「日本のプロエス運動」の発展を阻害したものは「機械的政治主義」であると強調した秋田雨雀⁽²³⁾が同伴者的なポジションに退き、『カマラード』の編集発行兼印刷人であり、JEIとの一定の協力を訴え内部批判的となった武藤丸楠は転向、その後エスペラント運動と疎遠になり、元〈柏木ロンド〉メンバーの中垣虎児郎、大島義夫もポエウの活動から距離を置き始めたのである⁽²⁴⁾。

ただし、前掲の『反体制エスペラント運動史』によると、彼らがポエウから離れたのは弾圧を恐れたためではなく、国内外のプロレタリア・エスペラント運動に加速されてゆく政治的路線に同調できなかったことが理由だということである。コップの政治的指導下に置かれ、言語文化運動としての活動を妨げられていたこの時期のポエウは、SATの分裂問題など国外のプロレタリア・エスペラント運動が抱える政治的問題にもリアクションを示さねばならなかったのである。

そして、1933（昭和八）年に入ると、前年春の大弾圧を逃れて地下活動をしていた小林多喜二が逮捕、即日虐殺される。この事件は左翼関係者のみならず日本社会全体を動揺させ、海外の左翼系文化人たちにも大きな衝撃を与えた。そして、同年6月の佐野学・鍋山貞親の転向声明発表を機に、大量転向の季節が始まることとなる。

ところで、多喜二の死の直後に刊行された1933年3月刊行の『プロレタリア文化』における、「国内文化時報 B「多数者獲得」の新たな意義を目指して逆襲に向ふプロレタリア文化運動 科学諸団体」のコーナーには、この時期のポエウの活動についての記事が掲載されている。

ここでは、ポエウは第二回大会の暴圧以降活動不振に陥っていたものの「一九三三年にはいつてからは断然逆襲に起つてモリへ活動を展開しはじめ」、PEK（国際通信）活動を旺盛化し、PUK（プロエス運動汎太平洋統一委員会）準備会の結成、プロフィンテルン機関誌『国際労働者運動』日本特集号への協力、水害と侵略戦争に苦しむ満州北部の労働者農民への救援の呼び掛け（「他団体で問題にしてゐない重要問題」とされている）など、国際的な活動を積極的に行っていると報じられている。プロレタリア文化連盟（コップ）にとってポエウは、日本のプロレタリア文化運動を国際的活動へと繋げうるという点において重要な存在意義を持つ部署であったことが窺えよう。

また、ポエウの政治主義偏向に厳しい評価を下している大島義夫も、この時期にポエウがPUK準備会を立ち上げていたことについては、「ヨーロッパ中心の運動に対して、アジア・オーストラリア・中南米の諸国に統一的な行動を行おうと呼びかけたことは、プロ・エス運動の新しい方向を示すものとして、その活動の意義を評価すべきであろう。」（『反体制エスペラント運動史』）と好意的な認識を示している。

そして、佐野・鍋山転向声明発表後にポエウが刊行した*INFORMILO de JPEU*

(1933年7月)では、上海反戦大会支持委員会の組織作り、戦争を支持する他のエスペラント団体との闘争が宣言され、エスペラント関係者以外の人々をも組織に取り込む必要性が呼びかけられている。この時期のポエウの存在意義は真に反戦組織団体としてのものであり、エスペラントの普及や研究を目的とした活動はもはやなされていないことが窺える。

また、台湾と朝鮮のプロレタリア・エスペラント団体からの寄稿を紹介している「EN KOLONIOJ」(植民地では)という記事は、この時期のポエウ及びコップと植民地のプロレタリア・エスペラント運動団体との関係性を示すものとして興味深い。

台湾の〈和泉三郎〉という人物からの寄稿「高雄通信」には、「当地のエス語は盛んになりつつある。講習20名、うち60%は本島人青年労働者」「吾々はポエウ本部との強き結合において、吾々の研究会を正しき発展へと推し進め得る。」「コップの働く婦人、大衆の友、われらの世界、産労通信 送ってほしい、金はキチキチ払う。」といった文章が記されている。また、佐野・鍋山の転向に対するポエウの声明書を評価し(「国家共産主義のギマン助言辞をバクロし、反動文化国粹主義の宣伝に弱められがちな日本プロ・エスペラントの××制への依存性に正しい認識を徹底さし、プロレタリアートの国際的連帯性を強化する点において適宜であった。」、)最後には、次のようにポエウの政治的優位性への支持を主張し、財政的援助を申し出ている。

漸く政治の優位性を認識し、その正しき軌道に入って来たJPEUだ。

そうだ。JPEUを正しい発展に押し進めるのは吾々プロエス大衆の共同任務だ。吾々の下からの力を強化することこそ、PEUの正しい発展を規定づけるのだ。

— この確信の下にTakao Esp-to. Studascioは凡てのカンパを通じて拡大を図ると共に財政的援助を常に忘れはしないであらう。

未曾有の弾圧と大量転向の始まりの時代において、日本のプロレタリア文化運動がますます信奉を強めることとなる「政治の優位性」の裏には、「反動文化国粹主義」「××制」(天皇制)との闘いがあったこと、そして天皇制国家である帝国日本の抑圧を受けていた植民地台湾からその闘いにエールが送られている、というヴィジョンが想起させられよう。

また、京城の〈Lueiřoka〉という人物からの「朝鮮においては」には、「テキストはJPEUの謄写版を使用／科外としてプロエスに対する意気を高ずる／三回にわたり、講習した友は21人」という情報が記されている(参加者の内訳は、労働者8名、学生11名、其他失業者)。そして、「朝鮮におけるエスペラントの発展も、他文化運動と同じく、その境地はプロレタリア・エスペラントにのみ与へている。吾々は

JPEUの旗手になり成功を誓ふ。朝鮮のエス同志を紹介してください。」と結ばれている。

一方、これに対しポエウ編集部は、次のように応えている。

内地における朝鮮のK-doとの連絡をつける。□の拳斗を祈る。

尚 植民地における同志諸君と、日本の吾々との関係については（組織上の）考究中だ。

大体において本部、支部との関係でなく、諸君は諸君の国において独立の運動団体を持つことになるのが原則だが、そこに行く課程として当分支部的な関係にあっても差支えないであらう。

詳細はもつと研究の上協ぎしたい。諸君の方でも研究されんことを要望する。

(K-do : kamarado =同志, □ : 判読不明)

ポエウを「本部」として仰ぎ、自らを「プロエス大衆」と規定する台湾のグループ、ポエウの「旗手」となることを誓う朝鮮のグループといった植民地側からのメッセージに対し、ポエウは、植民地の同志とポエウとの関係については考究中であるが、原則として、本部／支部の関係ではなく、それぞれの国で独立した団体を持つべきであること、ただ、そこに至る過程として支部的な位置づけでも構わないが、この件に関しては相互に研究が必要であると応えているのである。

次章で詳述するが、1934（昭和九）年にMARSU社^{マルシユ}を創設した元ポエウ神戸支部メンバーの中塚吉次は、ポエウの中央集権制を批判していたということである。しかし、この資料を信じる限り、ポエウは植民地に対しては中央集権制を強いていたわけではなかったように思われる。ただし、植民地側が自ら宗主国の運動を支持し、その「旗手」となる意志を提示してくるという様相は、当時のコミンテルンと各国の共産主義組織との力関係の変奏のようにも見えなくもない。ポエウに背を向けたエスペランティストたちは、コップの下部組織となってしまったポエウへの不満だけでなく、当時の日本のプロレタリア運動全体を支配していたソヴェート中心のプロレタリア国際主義自体に懐疑を抱いていたということも考えられるであろう。

そして、最後に紹介したいのは、1933年10月20日発行の『ポエウ』（JPEU No.3 大会特輯号1933.10）である。全二十九頁の、粗悪な紙質の手書きガリ版刷りの冊子であり、内容は「十一月七日・我全国大会を目指す日常活動の全面的強化を以て文化的・政治的立遅れの克服へー／ポエウ一般活動報告／ポエウ活動方針／ポエウ組織活動方針／第廿一回日本エスペラント大会を如何に斗ふ可きか？」というものである。

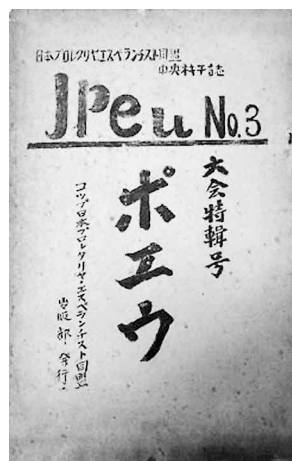
巻頭の「十一月七日・我全国大会を目指す日常活動の全面的強化を以て文化的・政治的立遅れの克服へ」では、「吾々を取りまく諸情勢」として、第一に、中国戦争の

拡大・ソヴェート武力干渉の切迫，第二に，防空演習・忠君愛国の宣伝・反ソヴェートのデマの撒布など，戦争のための諸準備の現状と労働者農民の日常生活の悪化，そして第三に，戦争強行のための「××制テロル」(天皇制テロル)の一層の拡大・治安維持法の改悪などが挙げられ，可視化されてきた非常時の傾斜に対するプロレタリア陣営の危機意識を具体的に知ることができる。

そして，「諸情勢」の「第三」には，「プロブガートル^{ママ}佐野鍋山三田村一派の世界無比の裏切りを契機とする転向製造の破レン恥な挑発にも不拘大衆の革命的昂揚の事実は顕著である」という叙述もある。転向問題に対するポエウの強硬な姿勢とともに，四ヶ月前に発表された佐野・鍋山の転向声明がいかに当局の宣伝に利用されてきたかということが窺えるであろう。

また，「我々は以上の様な情勢下に於て何を為すべきであらうか？」という問いかけの後，「我々の出版物に対し加へらるる弾圧」に対し，「同盟費，諸代の完納 維持費 募集活動の強化を以て出版物の定期刊行を斗ひ取り，我々の逆襲を示さねばならぬ。」という文言が記されているが，この言葉以上に，ポエウが筆舌に尽くしがたい弾圧を受けていることを如実に物語っているのは，このメディア自体が粗悪な紙質のガリ版刷りであるという事実であろう。わずか一年前にポエウが出版していた『カマラード』の豊かさを想起すると，信じがたいほどの落差である。それでもポエウは，自身の状態をそのまま表すかのような満身創痍のメディアを通じて，「我々」が「為すべき」こととして，反動エスペランティスト団体の反動的役割の事実，治安維持法・検閲制度の改悪の「バクロ」，小林多喜二全集の刊行を「斗ひ取る」こと，救援活動の活性化，コップ防衛基金カンパ，地区活動の強化などを呼びかけているのである。

転向の時代のポエウが遺したメディアからは，崩壊直前のコップの方針に背くことなく，資金収集活動と，立場の異なるエスペラント団体攻撃のための窓口と化し，エスペラント運動そのものの実体はないままに大衆の獲得を声高に叫ぶしかない状態に陥った組織の氣息奄々の息づかいが伝わってくるであろう。しかし，1934（昭和九）年9月の中央部の検挙により組織が完全に潰滅するまで，ポエウは一貫して反ファシズム，反帝国主義戦争の旗を掲げ続けた。世界の分断を克服しうる国際語の可能性の探求を第一義とするエスペランティストたちに背向けられたことにより，ポエウがエスペラント団体として形骸化してしまったということは確かであると思われるが，残されたメンバーが戦争阻止，そして思想・言論の自由を「斗ひ取る」ために，妥協を許さない姿勢で抵抗を続けたことも動かしがたい事実である。



城西大学神村和美研究室所蔵

急激にファシズム化し第二次世界大戦へと突き進んでゆく体制に抗うために、「正しい」と思う道を模索し、そのために言語運動の文化的な側面を諦めなければなかったとしても、彼らがあくまでもプロレタリア・エスペラント団体としての組織にこだわったということの意味は、当時の厳しい社会情勢と照らし合わせながら、より広い視点をもって最検討されるべきではないだろうか。

IV. 転向の時代におけるプロレタリア・エスペランティストたちの抗い

前章では、転向の時代のポエウの抵抗の軌跡をメディアから追ってみたが、本章では、ポエウの活動を相対化しつつ、プロレタリア・エスペラント運動を継承しようとした、元ポエウメンバーが創刊したメディアからその抵抗の軌跡を探っていきたい。以下、発行年順に、『国際語研究』(STUDO PRI LA LINGVO INTERNACIA), MARŜU, *Majo*を取り上げる。

i. 『国際語研究』 STUDO PRI LA LINGVO INTERNACIA

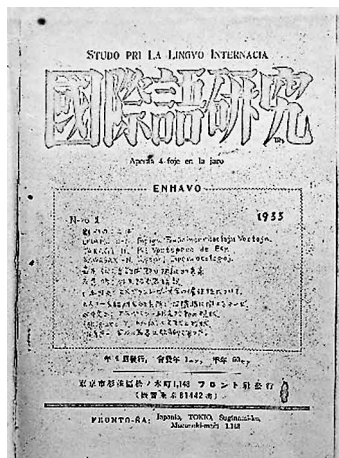
『国際語研究』 STUDO PRI LA LINGVO INTERNACIA は、プロレタリア・エスペラント運動の理論的指導者であった大島義夫が1933（昭和八）年1月に創刊した専門誌である。元〈柏木ロンド〉メンバーであり、ポエア・ポエウ両組織の創立者でもあった大島は、弾圧と内部分裂の時代を「反省期および理論的再検討の時期」とであるとポジティブに捉え、ブルジョア・エスペラント運動の主流派（JEI）の協力のもとにこの雑誌を刊行したということである（『反体制エスペラント運動史』）。

なお、創刊号には、大島が〈高木弘〉のペンネームを用いて書いた「言語問題の階級的意義」が掲載されている。ここで大島は、階級的言語運動の目的は民族語の言文一致、大衆性の獲得にあるとし、日本語をローマ字化し、エスペラントを国際語補助語として用いつつ、階級のない社会を目指すべきであると主張している。さらに、階級のない社会が実現された時に国際補助語は世界語となること、また、エスペラントは不変のものでなく、補助的過渡的言語であるという見解が述べられている。

全号のテーマを整理すると、エスペラント関係33%、国際語15%、言語学12%、ローマ字10%、ザメンホフ関係8%、階級と言語6%、国字問題4%、外国語研究4%、教授法3%、その他5%（軍事、書評など）という内訳になる。また、Drezenや Spiridovich など、海外（主にソヴェート）のエスペランティストたちの論文の翻訳は、全体の約26%を占めている⁽²⁵⁾。

なお、執筆陣には、ブルジョア・エスペラント側のJEI会員が多数おり、殊に「JEIの育ての親」の異名を持つ岡本好次は、ほぼ全期にわたり計10号分の原稿を寄稿している。また、ポエウが戦争支持をしているとして敵視していた「希望社」の設立者である後藤静香にエスペラントを教授し、機関誌 *Esperanto Kiboŝa* の編集者でもあ

った石黒修も、「イエスペルゼン国際語史」の訳注原稿や「Nuna situacio de lingvoj internaciaj」(「国際語の近況」)など8号分を寄稿しており、ポエウでは絶対にあり得なかった布陣であるといえる⁽²⁶⁾。



エスペラント博物館よこはま所蔵

この後、社会情勢の悪化により発行困難を予測したため、第16号(1936年7月)で自主的な廃刊を迎えてしまう『国際語研究』であるが、本格的な転向の時代へ突入する前に、専門性を武器に政治的な立場を超えた統一戦線的な連帯を目指したエスペラント雑誌が誕生していたことは記憶されるべきであろう。

なお、先ほど取り上げた大島の論文でもローマ字の導入が提唱されていたが、本メディアでは、日本に国際語導入を実現させるための前提としてのエスペラント・ローマ字の普及や各国のローマ字運動の取り組みが再三取り上げられていることも注目すべきであると思われる。

第Ⅱ章で触れたように、エスペラント運動とローマ字運動との関連性は、エスペラント上陸以前より胚胎されていたものであったが、弾圧と内部分裂による運動衰退期において刊行された『国際語研究』では、自国中心主義的な「日本式ローマ字」が批判され、「エスペラント・ローマ字」の普及が訴えられるなど(山本周夫「エスペラント・ローマ字の優位性について」1933年1月 創刊号)、より具体的に踏み込んだ提言がなされている。

殊に、最終号である第16号に掲載された、斎藤秀一「エスペラントとローマ字化の関係」は、ローマ字化とエスペラントの普及こそが複雑な日本語問題を解決し、大衆の知識の獲得と伝達を容易化しようという見解を、植民地言語政策問題なども含めた多角的な視点から述べたものである。斎藤の言語観は、彼を迫害した思想警察からは「マルクス主義言語観」という術語で片付けられているが⁽²⁷⁾、第Ⅱ章で確認したように、前近代よりローマ字による国字改革を求めてきた先人から脈々と受け継がれた公平な社会の為の言語革命意識と地続きであると思われる。

また、斎藤は、プロレタリア文化運動に共鳴し、帝国主義批判の観点からエスペラント運動を捉えていたという意味において、プロレタリア・エスペランティストと規定することが可能だと思われるが、彼の言語研究への姿勢は共産主義イデオロギーにのみ縛られたものではなかったといえよう。貪欲に様々な外国語を学ぶだけでなく、民衆の生活に根ざした言葉である方言を異化し研究していた斎藤の言語への関心は、より感覚的であり、より自由で幅広く、自律的なものであった。ちなみに、工藤美知尋は、斎藤が曹洞宗の寺に生まれ、幼い時から経典の詠唱の中で育ったという環

境が言語への興味を育んだと述べている⁽²⁸⁾。

なお、斎藤は、山形県で小学校教員として生計を立てながら、学校の児童や村の青年たちへのローマ字教育にも携わっていた。言語運動の現実にはぶつかりながら国語改革運動に従事し、1935（昭和一〇）年には『文字と言語』を創刊、〈言語帝国主義〉という術語を生み出した斎藤は、日中戦争が勃発した1937（昭和一二）年には国際ローマ字クラブを組織し、新たに*Latinigo*を創刊する。東北山形の地で特高警察の監視や周囲の無理解に苦しみながら、言語運動の理論と実践を体現し、言語運動史に大きな功績を残したのである。

しかし、1938（昭和一三）年、国際通信が怪しまれ検挙されたことから、斎藤に繋がるエスペランティストたちが芋づる式に検挙される「左翼言語運動事件」が引き起こされ、結果的に日本のプロレタリア・エスペラント運動は完全に潰え、斎藤も若くして命を奪われることとなった。

このような悲劇的結末から、転向時代の始まりでもある1933年に創刊され、言語運動への統制が強まるなか約四年間走り続けた『国際語研究』を振り返ると、斎藤のような実践的かつ進歩的なプロレタリア・エスペランティストから、中立主義の立場にある専門性の高いエスペランティストまでもが、真の国際語を実現させる社会の到来のために集結したこのメディアは、狂気の時代に知性で抗おうとしたエスペランティストたちの共闘の時を刻む貴重な記録としての側面をも有しているように感ぜられる。この時期のエスペランティストたちの多様な問題意識を概観するためにも、『国際語研究』は今後も研究され続けるべきであろう。

ii. MARŜU

1933年から本格的に始まった転向の時代において、文化運動としては形骸化してしまったポエウに代わり、プロレタリア・エスペラント運動の中心となったのは、神戸のMARŜU社であった。創立者は、元ポエウ神戸支部メンバーの中塚吉次である。

『神戸のエスペラント 年表と随想』（鈴置二郎編 神戸エスペラント協会 1990年7月）によると、中塚は、1934（昭和九）年3月に「一偏倒する極左偏向の運動方針にあきたらず」ポエウより脱退、上海世界語者協会（Ŝanhaja Esperantista Ligo）の運動方針を参考にし、合法性を保ち弾圧を避けるため、超党派的かつ大衆的、地方分散的な統一戦線運動という、柔軟な大衆路線を目指した。

そして、中塚らが34年9月に創刊したMARŜUは、附録『Nia Vivo』（我々の生活）を添付して第11号（1936年7月）まで刊行され、国内のみならずソヴェート同盟、IPE本部、オランダのIPE事務局、イギリス、フランス、中華民国、ブルガリアの各IPE支部等にまで配布されることで人民戦線が目指され、「階級的啓蒙ならびに国際的連帯性の強調を計」ってゆくこととなる⁽²⁹⁾。

さらに、中塚は地方のプロレタリア・エスペラントイストに再結集を働きかけ、その結果、大阪の宝木寛らのFrato（フラト（兄弟）社）、名古屋の佐藤時郎らのRondo Tagiĝo（「夜明けの会」という名のグループ）および機関誌Saluton（ポポーロ（人民）社）、岡山の久山専一郎らのAmiko（アミーコ（友人）社）など、関西、中国地方に次々と結社が設立されエスペラント運動が再開、雑誌が創刊されていった（『反体制エスペラント運動史』）。また、後藤齊『人物でたどるエスペラント文化史』（2015 一般財団法人日本エスペラント協会）によると、ハンセン病患者のエスペラント習得に力を入れていた外島保養院の院長が、特高に睨まれ辞任した「外島事件」の発端となった病院事務員の吉田清も元ポエウ幹部であり、起訴を逃れた後、MARSŪ社の運動に携わったということである。

なお、MARSŪは、ポエウが担っていた「IPE」日本支部の役割を実質的に受け継ぐことになるが、中塚らがかつてのポエウの中心メンバーよりも優れていた点として、エスペラントの国際的実用の側面が挙げられるという。大島義夫によると、コップが弾圧を受けポエウの活動家も検挙され、政治運動と文化運動の繋がりが混乱する中、エスペラントの国際的通信における意義を大衆的文化運動と結び付けて理解し、かつ実行し得たのは神戸の中塚らにほかならなかったという。

「Espの国際的実用」はポエウ創立以来の方針だったが、革命的文化運動全体の政治主義と幹部の技術水準の低さのため、PEK（プロエス通信）運動を十分に伸ばすことができないまま運動が停滞してしまったところ、「技術的にすぐれていた」中塚は、喘息の体を励まし、国際文化記事を基にして自ら謄写版を切り雑誌を発行し続けたということである⁽³⁰⁾。また、宮本正男も、MARSŪの戦術である「文通第一主義」について、「これは当人たちのことばではない。恐らくは東京あたりから出たものと思われるが彼らはこの活動を徹底的に、少くとも今までのポエウが不十分にしかやれなかったところをやったのけた」⁽³¹⁾と証言している。

ところで、「国際通信」への編集部の自負は、MARSŪの記事の中でも確認することができる。1935（昭和一〇）年第9号における「マルシュの存在とその意義 僕の抗議文をも兼ねて」（Morija-C）という文章には、「進歩的エス運動」のなかで「なんらかの意味で合法的に活動してゐるのは《マルシュ社》であり、雑誌《マルシュ》だけである」、マルシュの存在意義は「国際的協労の精神、国際勤労大衆の熱い握手と理解」にあり、「僕らのエス運動はその特質上、国際連結性が最も尊ばれる以上、国際的経験の交換、伝達、提供が特に肝要である。かくして運動に対する僕らの知識や



日本エスペラント協会所蔵

そのための経験が益々蓄積され、根強いものにされ、そして愈々現実的なものにされてゆく。」という叙述が見られる。中塚が骨折った「国際通信」は、当初からMARSUの存在意義として、同人を鼓舞していたことが窺えよう。

また、MARSUの国際通信の実力を象徴するような事柄として、MARSUがコミンテルン第7回大会のディミトロフ演説報告のエスペラント訳を入手していたことが挙げられる。ディミトロフ演説とは、社会民主主義者や自由主義者とも協力してファシズムと闘うことを主張し、ファシズムに抗する人民戦線政策確定のうで大きな役割を果たした演説であり、この報告は、野坂参三が「国際通信」の形で日本の社会主義団体にばらまいたということであるが、MARSUの場合は、イギリスを通じて *Inprecor* (コミンテルン機関誌) を入手し、エスペラント活動家たちと共有したということである⁽³²⁾。

そして、コミンテルンの統一戦線宣言ともいうべきディミトロフ演説を入手したMARSU自身もまた、同じく統一戦線路線を主張した。1935年第9号の中塚の報告「1935年度のエス界を締切る」(Nigra-K) では、MARSUはかつてのポエウのような「marksleninismo (マルクス・レーニン主義) を基調とした純然たるプロ・エス (プロレタリア・エスペラント) 運動」(括弧内: 引用者) ではなく、「ブル・エス (ブルジョア・エスペラント) と呼ばれていた中立主義エス運動内の進歩的要素を包含した統一戦線的なもの」(括弧内: 引用者) をめざし、「嘗つてのJPEUが学会に対してとった闘争的態度」は見せず、「最大限度協力の方針」を取っていると強調されている。そして、「JPEUが培った進歩的 esp-isto たちわ勤労大衆の要望にこたえて、再びその緑赤の旗お高く掲げたのである。嘗つての敗戦お再び繰返すことのないよう、細心の注意お払い国際進歩的エス運動の歩みに沿って、その旗を一年の間、休みなく前進させた。」という表現からは、「プロレタリア・エスペラント運動」という文言を封印し「国際進歩的エス運動」と言い換え、弾圧で潰されないよう細心の注意を払いながら分散することで再び勢いを取り戻しつつある当時の運動の状況、そして、ポエウが培った遺産を継承したプロレタリア・エスペラント運動を発展させているという紛れもない自負が窺えよう。前掲の鈴置二郎『神戸のエスペラント 年表と随想』では、中塚は「一偏倒する極左偏向の運動方針にあきたらず」ポエウより脱退したとあるが、中塚はポエウのかつての活動のすべてを否定しているわけではない。むしろ、ポエウの蒔いた種を育てようと試みていたのである。

しかし一方で、当時の読者側からは、MARSUが面白くない、問題の取り扱い方が狭い、という意見や、MARSUの存在意義である国際通信に対しても「『国際通信』一点張り」という不満の声が上がっていた(1935年第9号「読者の声」欄Nan-Kacu「MARSUへの不満1つ」)。

そして、このような声に対し、中塚は紙面を割き丁寧に対応している。中塚の答え

は、この運動の主体となるのは抑圧された人々であり、その人々の階級闘争による自己解放のためにエスペラントを適用する、そのための手段として国際通信がある—「国際通信に主力を注いでゐるのは、国際通信こそが、現在エスペラントをKlasbatalo（階級闘争）に適用するために、殆ど唯一の効果ある手段であり、方法だからである。」（括弧：引用者）—というものであった。

中塚は「プロレタリア・エスペラント運動」という文言を封印し、「国際進歩的エス運動」と言い換え、弾圧で潰されないよう細心の注意を払っているものの、この運動があくまでもプロレタリア・エスペラント運動であるという決意を漲らせている。読者の辛辣な声も敢えて掲載し、その声に真摯に応じてみせるなど、柔軟で開かれた運動媒体としての役割を展開していたことも、中塚のMARŜUの特長であろう。

また、次号となる36年第10号に掲載された、〈J. K〉という筆名の人物による文章「Nanka cu, Nigra-k 両氏の討論を読んで」は、読者の批判とそれに対する中塚の応答を踏まえ、次のように述べている。

MARŜUだけで、皆の要望に応えることは到底できるものではない。前に打続く弾圧のために他の組織が非常な困難に陥った折に《戦旗》が堂々と発行され続けてきたために、全国の読者から色んな要求にこたへるために《戦旗》が背負ひきれない使命を負ひたことがあるが、今のMARŜUに対するみなぎる信頼と要望の中には、丁度当時の《戦旗》に対するものがあるようだ。しかしMARŜUは希ひごとを一切かなへてくれる神様ではない。（中略）

私たちエスペランティストはたゞ単に読者だから読んでさへをればよいと云ふだけでなく、MARŜUをよくするためにどしどし具体的な要求を出し、またMARŜUにのってゐることで感心したことはどしどし実行に移すと共に、MARŜUだけで背負ひきれないものは別の仲間の手でMARŜUの同志のように骨身をくぐらして、勇敢にやっけてゆかねばならないと思ふ。徒にMARŜUに不平を並べるだけではなく、MARŜUに見ならって、各々iniciativoを発揮して別な分野でも元気よく仕事を始めること、これが肝心だと思ふ。

MARŜUが、かつて隆盛を極めた共産主義系プロレタリア文学運動の機関誌『戦旗』と同様の立場に置かれているという意識、運動を牽引する側の苦悩、そして、読者に対し、徒に受け身に徹するのではなく行動を起こすことを呼び掛けているこの文章は、華やかかなりし頃のプロレタリア文化運動を知り、それを引き継いでいるという彼らの誇りと、プロレタリア文化運動がこだわり続けた運動の〈大衆化〉という課題に対し、彼らが未だに真摯に向き合おうとしているという真実を物語っていよう。

過去のプロレタリア・エスペラント運動をリスペクトしながら、同時にそれを相対

化していたMARSŪは、ファシズムへと転がり落ちつつある世界に対し共同戦線を張り対峙するという使命感に溢れ、読者とのコミュニケーションをも重要視する、その名の通り前向きなメディアであった(MARSŪ = 進め)。しかし、1936(昭和一一)年12月、MARSŪにも弾圧が襲いかかり、関係者が検挙されてしまう。

中塚は、事前に全協(日本労働組合全国協議会。共産党指導下の左翼労働組合)関係で起訴、保釈されていたが、この時に再逮捕され、拷問がもとで結核性喘息が悪化、37年に阪大病院で亡くなった。また、MARSŪ、そしてMARSŪの呼びかけで結成されたFratoの「名プリンター」であった阪上睦郎も囚われてしまう。その後も追及の手は止まず、阪上は40年に獄死、Fratoの責任者・宝木寛も拷問により重体に陥った後釈放されるも、入院中の結核療養所から再び連行され、43年に没した⁽³³⁾。

このような、とても「偶発的」とは呼べぬ苛酷な弾圧により、約三年間の命を終えることとなったMARSŪであったが、戦後、宮本正男らによってその意義を明らかにしようとする働きかけにより、復刻版が刊行されている。弾圧下において、彼らが武器としたものは、硬直した政治的イデオロギーではなく、エスペランティストとしての語学能力及び組織力、国際意識と人権意識によって貫かれた自己解放の理念であった。中塚らが強権の下で掴み取ろうとしていた、国境を越えた人間の生活の繋がりと言葉の関係性は、資本主義国と社会主義国の分断が深まり民主主義の意味が揺らいでいる現在こそ、捉え直されなければならないであろう。

iii. ^{マ-ヨ}Majo

それでは最後に、1936(昭和一一)年3月創刊のMajoを取り上げたい。『反体制エスペラント運動史』によると、全文エスペラントのこの雑誌は、今回取り上げてはいないが『国際語研究』と統一戦線を目指した『エスペラント文学』の影響下に生まれ、36年5月の同誌の廃刊と前後して創刊された。エスペラント文学の確立を目指す栗栖継が、MARSŪ社の中塚らとともに35年5月に〈マーヤ・ロンド〉という名のグループを作り、この活動に共鳴した米村健が編集発行兼印刷人となり発行し、イアレヴ(国際革命エスペラント作家協会)の日本支部の機能を果たしたということであるが、発行回数は三回(1936年3月、7月、11月)、第1号~3号のみの刊行に終わっている。

なお、下記は巻頭言「Saluto ĉe la Fronto de l' 36a Jaro」(「1936年における前線への挨拶」)の一部の拙訳である。

われわれ進歩的エスペラント文学者グループは、読者諸君と同じ民族として、われわれの血を諸君の静脈に流し込み、静脈中の結び目としての役割を果たすべくこの小冊子を届ける。

大衆の生活の最も真実に近い姿は、文学のなかに映し出されている。われわれの文学が高められれば高められるほど、大衆の真実の声も大きくなる。心臓の血が昂ぶれば昂ぶるほど、われわれの《Majo》は諸君の静脈のなかで力強く脈打つだろう。

(日本語訳 神村)

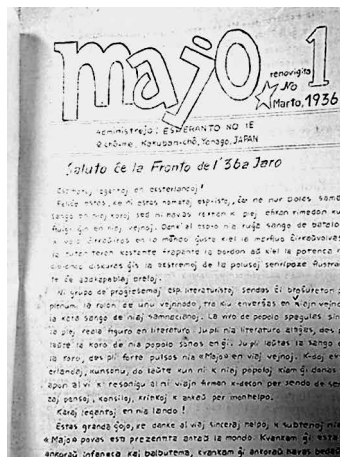
また、「国外の同志たちよ、我々に共鳴するならば、ともに大きな声で叫べ。諸君らの真剣な考え、助言、批評、資金援助を待っている。」(日本語訳 神村)と、国外の読者への熱い呼びかけも記されている。大衆と文学とをエスペラントで結びつけ国際連帯をはかるといふ志向性が情熱的に謳われている巻頭言であるといえよう。

ところで、この雑誌の主な特徴は、運動の方向性を見失ったプロレタリア文学とエスペラント運動を結びつけるべくプロレタリア作家たちの動向を紹介し、特に雑誌『文学評論』と密接にリンクしていることにある。

『日本近代文学大事典』第4巻(編著 日本近代文学館・小田切進 1977 講談社)によると、『文学評論』とは、1934(昭和九)年3月から36年8月にかけて左翼系出版社であるナウカ社より発行された雑誌である。プロレタリア文学運動からいち早く転向していった林房雄と微妙に共鳴していた徳永直や渡辺順三らが出版社に働きかけて生まれたもので、発行部数は3000~5000であった。

創刊当初の目的は、プロレタリア作家同盟(ナルプ)解体という新しい事態に直面し、それまで運動の主流として君臨していた小林多喜二流の政治主義的偏向の論理を再吟味し、政治から文学への正当性を検討するというものである。なお、この雑誌は、運動崩壊後に依拠すべき組織のなくなったプロレタリア文学者の拠点となっていたが、島木健作にみられるような「積極的転向」に通ずる要素も含んでおり、当時の混迷したプロレタリア文学者の内実を反映していた。そして、1936年8月、ナウカ社の社員全員逮捕により、廃刊を余儀なくされたということである。Majoが1936年3月、7月、11月のわずか3号のみの発行で終結したのは、『文学評論』との繋がりが原因であると推測できるであろう。

Majoは、ナルプ解散以降、組織を持つことができなかったプロレタリア文学者が創刊した雑誌の中で最も影響力があるものとして『文学評論』を位置づけ、その内容をエスペラントで宣伝していった。そして、林房雄の独立作家クラブ創設(Klubo de Prolerverkistoj Fondita)の話題や、当局が創設した文芸懇話会賞が投票結果を無視して島木健作を排除した件に対抗しての〈文学評論〉賞の設立(La Premio de



日本エスペラント協会所蔵

《Literatura Revuo》Instalita：『文学評論』賞の設立）のニュースなどにも誌面を割り、組織を失ったプロレタリア文学者が活路を求め、弾圧や排除の中でも連帯してゆく姿を発信していたのである。

また、元プロレタリア作家・貴司山治が副編集長を務める雑誌『文学案内』（*La Gvidanto Literatura*）もよく取り上げ、貴司が国際的なトピックを扱うためにエスペ란ティストに協力を求めたことや、徳永直や橋本英吉の作品が上海のエスペラント雑誌に掲載されたこと、そして文化擁護国際作家協会から日本の進歩的作家たちに、東京での雑誌発行の協力と作家同士の連帯を呼び掛ける手紙が来たことなども紹介している。さらに *Majo* 第2号（1936年7月）には、貴司の戯曲「洋学年代記」（『文学案内』1936年5月）の舞台の感想も掲載されていることから、貴司とプロレタリア・エスペ란ティストたちとの親密さを感じられようが、同時代の中立的なエスペラント雑誌を紐解くと、彼らの関係はそれほど穏やかで単純なものではなかったことも見えてくる。

例えば、*La Revuo Orienta*（1936年5月）に掲載された貴司の「エスペランティストは独善主義をすてよ（4月14日文芸懇話会席上での談話）」という文章では、小林多喜二の「蟹工船」のエスペラント訳に取り組んでいるエスペランティストに協力しているのにもかかわらず「エス訳が何時どこから出のかどうするのかきいてやつたが何とも返事をよこさない」、「こちらを利用する一方でこちらの役に立つことをしてくれないこんな利己主義ではきはれるのも無理はない」という不満や、『文学案内』にエスペラント欄を設けても「エス文の読めぬ読者には無用」であること、それよりもエスペランティストが集めた国際的なニュースを日本語に訳し、広く伝えることの方が重要である、だがエスペランティストは情報を独占している、といった批判が綴られている。最後に貴司は「エスペラントに好意を持つ外部のもの」として「忌憚なく申上げた次第ですからあしからず」とトーンダウンさせて締め括っているが、これに対し、この懇話会に出席していた長谷川テルが、*Majo* 第2号に寄稿した「Amikiĝkunveno kun nacilingvoj literaturistoj」（国文学者たちとの文芸懇話会）において、次のように反撃している。

プロレタリア文学こそエスペラント訳がなされるべきだと疑いなく思われているが、エクレーロ（革命的エスペラント図書出版協同組合）が失速している以上、「蟹工船」の出版の可能性については明確に肯定することはできない。

「蟹工船」は検閲で損われ理解不能というにひとしく、実りが無い。プロレタリアの鍛練のためというわけでもないのであれば、最も賢明な答えは「翻訳しない」ということだ。

（日本語訳 神村）

エスペラント運動の現実問題に対し想像力を欠いたプロレタリア作家の傲りのようなものをテルは感じ取ったのではないだろうか。なお、「蟹工船」は当初、栗栖継が貴司の手を借りてエスペラント訳するも発行が叶わなかったということから、貴司の文章に登場するエスペランティストは栗栖であろう。しかし結果的に、栗栖のエスペラント訳からスロヴァキア語訳「蟹工船」が生まれていることから、エスペラントの本領ともいべき派生性が窺える点も感慨深い。

ところで、長谷川テルは、今さら紹介するまでもない非常に著名なエスペランティストであるが、彼女が〈Verda Majo〉(緑の五月)のペンネームでMajoに毎号寄稿していたことは注目に値するであろう。

テルが寄稿した文章のタイトルを挙げてみると、第1号「Kiel Statas Proleta Literaturo en Japanio?」(日本のプロレタリア文学はいかなる状況にあるか?)、第2号「Amikiĝkunveno kun nacilingvoj literaturistoj」(国文学者たちとの文芸懇話会)、第3号「Oni prezentis dramojn de Gorki」(上演されたゴーリキーの演劇)となる。第2号についてはすでに触れたため、以下、第1号と3号のテルの文章の内容を簡単に紹介する。

第1号「Kiel Statas Proleta Literaturo en Japanio?」においてテルが力強く主張するのは、反動の嵐によってプロレタリア作家同盟は解体したが、それはプロレタリア文学の死を意味するのでは断じてない、ということである。また、政治主義と闘うのではなく、ペンで以てテロと戦うこと、あらゆる試みを通じて前進することを情熱的に呼び掛けている。先に触れたように、Majoが積極的に紹介していた『文学評論』は、プロレタリア文化運動が陥った政治主義を相対化することを目的としていたが、テルの主張はこのような路線とは一線を画しているといえよう。他の文化運動と同様、Majoもまた一枚岩ではなく、むしろ様々な立場の執筆者を受け入れていたのではないだろうか。なお、Majo第3号の「Kroniko de 《Majo》」(通信欄)によると、この文章は中国語に翻訳され、天津で発行されていた『北調』(Norda Tono)という雑誌に転載されたということである。

そして、1936年6月に亡くなったゴーリキーの追悼特集であり、最終号となる第3号は、内容からして、36年8月に刊行された『文学評論』ゴーリキー追悼号を承けてのものであることは一目瞭然であるが、この号に寄稿した「Oni prezentis dramojn de Gorki」において、テルは、ゴーリキー追悼の演劇を中国人や朝鮮人の同志たちと共に観劇したこと、新劇グループは「どん底」と「エゴール・ブルイチョフ」を上演したこと、「日本の二つのグループ—新協と新築地、そして中国演劇協会の主に学生が協力し合い、中国語で「幼年時代」を演じたこと」に触れ、「それは国を越えた世界文学の巨人を記憶に留めるに相応しいものであると同時に、新劇運動における日本と中国の労働者の連帯を重要視していることを意味している」と、その感動を綴って

いる。

Majo 廃刊の翌年である 1937 年、テルは中国大陸へ渡り抗日宣伝活動に従事、日本軍向けの反戦放送を担当し、反戦、国際平和の立場からエスペラント作品を遺す。このようなその後のテルの足跡を想起すると、テルが Majo 最終号に刻んだ文章は恰も彼女の未来を予告しているかのようにも感ぜられよう。

また、闘うべき相手は内なる政治主義よりも弾圧者であるという見解、検閲のため損なわれた「蟹工船」のエスペラント訳の出版を当然のことと捉えているプロレタリア作家への冷静な反応には、運動の顛末を清算せず、形だけの文化運動の立て直しを急ぐ作家たちとの齟齬が揺曳している。さらに、その齟齬は、多くの元プロレタリア作家達が、転向後、国策に飲み込まれ、戦争責任を問われるような立場へと自らを追い込んでしまったあり方と、国境を越え、言葉の力で反戦を訴え、最後までエスペランティストとして生き抜いたテルの生き方との対照性をも浮かび上がらせている。

最後に改めてテルの寄稿から Majo を捉えると、Majo とは、行き場を失った元プロレタリア作家に活路を提供すべく活動した『文学評論』に寄り添ってはいるが、転向の疵を負った作家たちを盲目的に擁護するのではなく、転向の時代のプロレタリア作家たちが真に闘うべき相手をエスペランティストの立場から示し、反動の時代への共闘を呼びかけるメディアであったといえるだろう。

V. 考察

転向の時代にプロレタリア・エスペランティストたちが遺した仕事からは、ポエウのみならずプロレタリア文化運動全体が陥ったとされる政治主義のみを批判するあり方を相対化する観点や、ポエウから受け継いだ安易に体制に与しない社会改革の精神を育てつつ、中立主義者とも連帯することで合法性を保ち、運動の新たな活路を切り拓こうと努力する元ポエウメンバーの姿、そして何より、理想主義という言葉で切り捨ててしまうにはあまりに生々しい、彼らのエスペラントの将来性に賭けた希望、言語による世界改革への信頼がいかに揺るぎないものであったかということが見えてくる。

1930年代という困難な時代における彼らの抵抗は、ウルリッヒ・リンスが表現した「自殺的抵抗」といった英雄主義的なものとは程遠く、あくまでもプロレタリア・エスペランティストとしての個を貫き生き抜くための抵抗であったと思われる。だからこそ彼らは、困難を極めながらも、エスペラントに階級問題を克服した平和な社会を到来させる潜在的能力を見出し続け、またそれを信じ続け、プロレタリア・エスペランティストとしての自己のアイデンティティを持ち続けられたのではないだろうか。ここで再び、中野重治の言葉を引きたい。

たたかい仆れた人々は、彼らの個を、封建的・専制的なものの許す範囲、見のがす範囲にとどめておくほどには侮蔑することができなかった。侮蔑することを欲しなかった。彼らは、彼らの個を、ある限度ででなく無限に、歴史と階級とのなかで全般に解放し、伸ばし、発展させようとしたのである。

(34)

生き抜くための抵抗の奥にある彼らの心を見事に言い表した中野の言葉は、言葉の力というものを、改めて現前化させている。

現在のグローバルなインターネット社会では、端末に触れられる指先があれば世界と繋がるのが可能であるといっても過言ではないが、一方で言葉はアンビバレントな様相を強めている。匿名のもと無責任に放り出され、その重みは限りなく無に近づいたかと思うと、容易に繋がれるはずの世界を一瞬で破壊してしまうほどの力を持つ。しかし、このような言葉の危うさは現代に限ったことではなく、関東大震災の際の流言飛語とレイシズムの結びつきにもそれは顕れている。

関東大震災から100年、そして、言語の違いがポグロムを引き起こすという悲劇を再び現代に甦らせたロシアの本格的なウクライナ侵攻開始から丸一年が経ってしまった現在、世界では様々なレベルの分断が進み、民主主義や人権、国際平和の意味が揺らいでいる。このような時にこそ、真の国際性とは何か？人間にとって言葉とはなにか？という哲学的な問いを投げかけてくるプロレタリア・エスペランティストたちの精神に光が当てられるべきであろう。

彼らがエスペラントに見出した、階級や民族、ジェンダーの対立のない共生社会到来のための言語革命への希望は、新たな危機の時代への扉を開いてしまった現代において、希求されるべき国際平和社会のヴィジョンを鮮やかに照らし出す灯火となるに相違ない。

《注》

1. 柴田巖・後藤齊編 峰芳隆監修『日本エスペラント運動人名事典』（ひつじ書房2013）
2. 大和田茂「関東大震災と文学 二、土田杏村『流言』の先駆性」（初出『日本古書通信』第81巻第9号2016.9、『日本近代文学の潜流』2022 論創社109頁）
3. 初芝武美『日本エスペラント運動史』（1998財団法人日本エスペラント学会）58頁
4. 初芝・前掲注（3）
5. 大和田茂『社会運動と文芸雑誌—『種蒔く人』時代のメディア戦略』（2012青柿堂）22頁によると、『種蒔く人』は大杉らの虐殺には「故意か自然か」冷淡であったという。背景には、アナキズムとボルシェビキの思想的対立があったものと思われる。
6. 三宅栄治『闘うエスペランティストたちの軌跡—プロレタリア・エスペラント運動の研究』

(1995 リバーロイ双書 I) 22頁によると、1920年7月、福田国太郎が全文エスペラントの『ベルダ・ウトピーオ』を刊行、山鹿泰治がP.ベルテロー『時の福音』のエスペラント訳『平民の鐘』を出版、中国のアナーキストたちとエスペラントを用いて共闘していたということである。

7. 編集メンバーは、プロレタリア科学研究所エスペラント研究会の秋田雨雀、佐々木孝丸、武藤丸楠、伊東三郎、新島繁、中垣虎児郎、大島義夫。詳細は神村和美「『武器』と『芸術』の国際語（エスペラント）—JPEUとプロレタリア・エスペラント運動—」（『城西大学語学教育センター研究年報』第12号 2020.3）を参照していただきたい。
8. Ulrich Lins. (1975). *LA DANĜERA LINGVO*. 栗栖継（訳）(1975). 『危険な言語』岩波新書 栗栖継の「訳者はしがき」によると、本書の原型は、京都のL' omnibus社から1973年に刊行された *La danĝera lingvo—Esperanto en la uragano de persekutoj* であるが、リンスは岩波新書版のためにL' omnibus版を基礎として全面的に書き直したということである。
9. Ulrich Lins. (1975). *LA DANĜERA LINGVO*. 栗栖継（訳）(1975). 『危険な言語』岩波新書 108~117頁
なお, Ulrich Lins. (1990). *LA DANĜERA LINGVO Studo pri la persukutoj kontraŭ Esperanto, progresso* によると、栗栖継訳「プロレタリア・エスペランティストたちの自殺的抵抗」の原文にあたる箇所は “memmortigan reziston de proletoj” である。
10. 中野重治「過去の作家・作品の新しくよびかけるもの」(多喜二・百合子研究会編『小林多喜二読本』1958 三一書房) 194頁
11. 初芝・前掲注 (3), 「世界語の評」(『読売新聞』1888. 5. 2) を参照した。
12. ロマン・ロラン、山口小静訳「人類解放の武器はエスペラント」(山口小静『匈牙利の労農革命』1923水曜会出版部)
13. 『読売新聞』だけでも次のような記事がみられる。「世界語と英語」(1888. 3. 1), 「世界語文法」(1888. 4. 28), 安孫子貞次郎「世界語（エスペラント）の価値と勢力について」(1906. 5. 29)
14. 初芝・前掲注 (3) 12~16頁
15. 斎藤秀一「エスペラント原作文学の展望」(『駒澤文学』第11巻 1931. 2) 20頁
16. 松尾尊兌『大正デモクラシーの群像』(同時代ライブラリー35 1990 岩波書店) を参照した。
17. 三宅・前掲注 (6) 26~36頁, 山口小静『匈牙利の労農革命』(1923 水曜会出版部) を参照した。
18. 三宅・前掲注 (17) に同じ
19. 並松信久「比嘉春潮と沖縄研究の展開：インフォーマントとしての役割」(『京都産業大学論集』2013. 3) を参照した。
20. 中垣虎児郎「ボ・エ・ウのころ—戦前のエスペラント運動の思い出—」(『文学』1964. 1)
21. 神村和美「『武器』と『芸術』の国際語（エスペラント）—JPEUとプロレタリア・エスペラント運動—」（『城西大学語学教育センター研究年報』第12号2020.3）
22. 『カマラード』(1932. 4), 大島義夫・宮本正男『反体制エスペラント運動史』(1974 三省堂) を参照した。
23. 「弾圧下にかかれたポエウ第二回大会」(『カマラード』1932. 4)

24. 柴田・後藤・前掲注 (1)
25. エスペラント博物館よこはまのドイヒロカズ氏作成のリストを参照した。
26. 柴田・後藤・前掲注 (1)
27. 昭和十四年十一月『思想月報』第六十五号 (『昭和前期 思想資料 第1期』1974 文生書院)
28. 工藤美知尋『特高に奪われた青春 エスペランティスト斎藤秀一の悲劇』(2017 芙蓉書房出版) 34頁
29. みやもとまさお「マルシュの弾圧」(『“MARȘU” INFORMILO N-ro4』1958. 5. 1)
30. 大島義夫「“MARȘU” の中心的活動家 中塚吉次君のこと」(『“MARȘU” INFORMILO N-ro3』1958. 3. 1)
31. 宮本正男「『“MARȘU” の意義』(『“MARȘU” INFORMILO N-ro1』1957. 8. 7)
32. 宮本・前掲注 (31)
33. 柴田・後藤・前掲注 (1)
34. 中野・前掲注 (9) 197頁

【附記】

本稿は, Association for Asian Studies Annual Conference (March 25, 2022 Honolulu, Hawai'i) での口頭発表, および第109回日本エスペラント大会 (2022年9月25日 於八王子市学園都市センター) での講演に基づくものです。

研究調査にあたり, エスペラント博物館よこはまのドイヒロカズ氏, 日本エスペラント協会の相川拓也氏, 東北大学名誉教授の後藤齊先生より, 多大なご協力, ご教示を賜りました。心より深謝申し上げます。